



高橋清輝

著

立川女子高校山岳部の記録

ヒマラヤすばらしき

教室

ヒマラヤという
大自然を舞台に、
自らの持つ力のすべてを
賭けて挑み、困難を克服し、
大きな喜びをつかむ。
そこに生じる自信が、いかに
尊いものであるか……。

けやき出版



脚・著

やすばらしき教室

立川女子高校山岳部の記録



ヒマラヤ すばらしき教室

立川女子高校山岳部の記録

1991年2月25日 第1刷発行

定価1600円（本体価格1553円）

著 者 高橋清輝

装幀者 杉浦康平＋谷村彰彦

図版作成 有限会社桐原デザイン工房

写 植 設計工学研究室

発行者 清水 定

発行所 株式会社けやき出版

〒190 東京都立川市柴崎町3-14-17

☎ 0425-25-9909

印刷所 株式会社平河工業社

序・限りない「めぐりあい」のありがたさ

平山 三男

邂逅……という美しい言葉がある。「めぐりあい」という意味である。我々は様々な邂逅の中に生きている。そうした邂逅の中で、人によって支えられ、時に人を支え、もたれあい、生きてあることの喜びを共にしている。

この書にはそうした様々な美しい、そして興味深い邂逅が書かれている。

シエルパのリーダーのペヌリ。何でも「ハイ、そうです」とすませる彼のしたたかさと、その陰にある困惑。そうしたペヌリと、ユーモアある諦めを含んだ立川女子高校登山隊の微妙なすれちがい。これは貴重な異文化との邂逅であり、人間同士の真の邂逅でもあろう。

そして、ヒルの襲撃、足のマメの「熱湯療法」、雨・雨・雨、見事なお花畑、食事時間の違いに象徴される登山概念やそれを通して見える人間の在り方の違い、さらに、母堂を通しての著者の山との邂逅など、様々な「邂逅」の姿が本書の随所で語られている。

やがて、クライミング。雨雲の中に見えない峰への急登、高度障害との戦い、チュル―南東峰との邂逅、その初登頂。

それに至る過程は劇的である。

しかし、こうしたことは読者諸氏に本書の中で直接「邂逅」していただくことにしよう。また、今回の「女子高校生登山隊」による「ヒマラヤの高峰の世界初登頂」という「偉業自体」の「登山史上における意義」を位置づけ、その真率な姿を称えろという意味においては、私などより、本書の序文を書かれるのにふさわしい方々は別におられる。

私が序文を書かせていただくようになったのは、かつて私も奉職していた立川女子高校での本書の著者との邂逅による。

高橋清輝先生。実は、我々仲間は親しみをこめて「キヨさん」と呼んでいる。先輩としてのキヨさんには公私ともにお世話になったが、特に山岳部の第三次海外遠征、ヒマラヤ、ゴーク・ピーク、第四次海外遠征、カナダ・ツインズへ同行させていただいたのは、貴重な経験であり、このような訳で、今回遠征隊員の中に懐かしい名も多い。第三次遠征で高度障害に苦しんだ佐藤（七里）隊員が、今は母親となつて、先輩としての役割を果たしながら登頂したのは何よりも嬉しいが、第四次遠征でリーダーを見事に務め、今回も隊員の要の一端を務めた結城隊員の、最後の決断に高山病の恐ろしさと思議さを改めて思う。また、同じく第四次隊員としてカナダに行った荒川の登頂は、彼女の旧担任として心弾む。桃井さんはその時のザイル・パートナーで、酒仲間。その他の隊員も、キヨさんによつて直接・間接にめぐりあわせていただいた仲間ばかりだが、玉川さんの名を見た時、氏の

尊父、第一次遠征隊員であつた故・玉川氏のことが思われ、感慨深い。故・玉川氏は、現代の若い人が己の成し遂げたことをないがしろにしがちで、共にそれをやりとげた人々との思い出も大事にしないことを嘆いておられた。

それこそが、実はキヨさんの思いでもあつた。キヨさんはこの様な人の出会いを大切に、成し遂げた自分を誇りにすることを隊員に教え、同時にそれが多くの人々に支えられたものであることを説いている。

という訳で、キヨさんは多忙な中でも立川女子高山岳部会報「ケルン」を欠かさずに発行し、卒業生や私のような「番外」会員にも常を送付し、会員の現状を伝え、山行の案内をすることを怠らない。だから、一度キヨさんの本にめぐりあつた人の邂逅は常に大切に自然にキヨさんを中心として保たれている。

こうして作られてきた山岳部OG会を初めとし、キヨさんとのめぐりあい、その周囲にいられる様々な人々の力の総結集によつて今までの全ての「山行」が成功したのである。こうしたキヨさんの「組織力」を生臭い「政治力」と勘違いしてはならない。人と人の「邂逅」をそれぞれの場所で出来るかぎり大切に、それを一つの成果としてまとめていく。その有り難さを、それを大切にすることを身をもって示していく。それは教育の原点ではないだろうか。私自身も、キヨさんに「邂逅」し、様々なものを学んだ。とりわけ、ツインズ登頂の後、一週間に及ぶ吹雪の中の停滞で常に笑いを忘れず、互いに支えあつたチー

ム・ワークや、ゴーキョ・ピークへの苦しい一步は生きる力の自信の原点として、その仲間への信頼とともに、その後の私の中にある。

人間は多様である。キヨさん自身の山、キヨさん自身の生き方は他にあるかも知れない。しかし、ここには山をやる熱心な教育者としてのキヨさんがいる。そうしたキヨさんによってめぐりあった様々な人の調和が描かれている。その成果としての登頂が描かれている。それに現役生として「邂逅」した子らは幸せである。おめでとう、その子らよ。

そして、キヨさんの織り成す色々な「邂逅」がさらに豊かに実ることを祈りたい。

ヒマラヤ すばらしき教室……目次

序・限らない「めぐりあい」のありがたさ 平山三男 1

ブローグ 8

創部からチュルーへ

「より高く、より困難に挑戦」 12 目指すはチュルー南東峰 21

白き神々の座・ヒマラヤチュルーを登る

期待と不安の中、成田を発つ 32 バンコクからネパール・ドノバンへ 36
ポーターは総勢40人、日当500円 41 ペヌリの「ハイ、そうです!?!」 44
星とホテルの光の饗宴 51 アンナブルナ街道随一の街、ベシサハールへ 59
ヒルの出現地を無事通過 63 マメ治療に塩湯療法登場 67
カップラーメンは「日本の味」 76 リコーダーと文具をプレゼント 79
アンナブルナの裾野との遭遇 85 キャラバン最終日、3000メートルを越える 90
ベースキャンプへ、4000メートルを越える 98 アンナブルナへ届け「立川の山娘」 107
アタックキャンプへ、5000メートルを越える 113 「チュルーが見えたぞ!」 124
やった! 6558メートルに立つ 131 雪崩の音に送られてベースキャンプへ戻る 159
再び、キャラバン開始 164 心身ともに疲労は極限状態に 169

道に迷う・ヒルが出る・川に落ちる…大混乱 173 “敗残兵”を迎えたロールケーキ
 キアラバン最終幕営地の夜 184 キアラバン終了、隊長宙に舞う 188
 カトマンズの朝、日本の母を思う 199 さようならチュル、さようならネパール 205
 のんびりくつろいだバンコクの1日 211 「私たちより、ずっとすごいよ」 213

「拝啓、高橋先生」……チュルから帰った彼女たち 219

エピソード 239

あとがき 242

素顔の隊員たち 247

著者紹介 259

付記

- ①ネパールヒマラヤ・チュル―南東峰登頂の記録
- ②チュル―南東峰の位置と高度について
- ③立川女子高校山岳部海外遠征登山の記録

プロローグ

目が痛くなるほどまぶしい青空が広がっている。雪の純白と空の蒼さだけの世界、物音ひとつない静寂の世界……。ザックザックとアイゼンの音だけがこの静寂を破り、時折、「フアイト！」の掛け声が響く。黙々と、ただ黙々と、うつむいて進むだけである。高山病で割れるように痛む頭は、もう何も考えることはできない。ピークを踏む。それだけしかない。ここまでやって来たからには。

ふと、足を止めて見あげた目に、ピークが映った。一瞬の沈黙。見かわす目と目……。ここが、ピークか。ほんとうにそうなのか。まだ、信じることはできなかった。チュール南東峰は双耳峰になっていることを知っていた。現に、もうひとつ、先にもピークが見えるではないか。

冷静に、冷静に、とわが身をなだめながら、シエルバと確認する。そして、ふたりの意見は一致した。これこそ、ほんもののピークだ。絶対だ。

初めて、胸に熱い熱いものが込み上げてくる。

「やった、ついにやった！」

あれほど憧れていたチュール南東峰、そのピークが目の前にある。みんなの夢が、あと一步のところにある。

そう思ったとたんに、長かった今までの時間が、その苦勞が、激流のように胸に押し寄せてきた。目をつむつてもう一度開けたら、消えてしまうのではないか。そんな疑念さえ浮かぶ、信じられないほどの至近距離にあるピーク。胸が震えて、ことばが出ない。

しかし、一刻も早く、皆に知らせなければ。絞り出すように、声を張り上げる。

「オーイ、ここがピークの真下だぞ。頂上は目前だ。頑張れ！」

その声が耳に入ったとたんに、後に続く隊員たちの顔がパツと輝く。黙々とうつむいて歩んでいた姿が、うれしさにはじける。

「ワァー！」

歓声上がる。

「最後だ、ファイト！」

OGたちが励ます。

そして全員がピークに辿り着いた。

「やったー！」

「信じられない！」

喜びに呆然としながら、涙をボロボロこぼす隊員たち。青空の下に、抱き合いむせび泣く乙女たちの姿があった。

ほんとうに、ピークを踏んだのだ。誰もがそれを確認し、確認しながらも信じられない。あまりのうれしさに、夢の実現を実感できないのだ。

この一瞬のために重ねた厳しい訓練は、こうして実った。おまえたちの、ほんとうにおまえたちの力が夢をかなえたのだ。

「結城さん！」

「タカチャーン！」

「モトミチャーン！」

心ならずも登頂できなかった仲間たちへ届けとばかりに、乙女たちの声が響く。青空のかなたへ、アンナプルナ山群の向こうへ、流れていく。

8月15日、午後1時26分、白き神々の国・ネパールヒマラヤのチュル―南東峰はこうして制覇された。

創部からチュルーへ

「より高く、より困難に挑戦」

1965年に早稲田大学を卒業した私は、立川女子高校社会科教諭として奉職した。この学校に決めたのは、前校長が私と同じ哲学を専攻していたということによるご縁と、山を自由にやらせてもらいたいという望みが受け入れられたからである。

山岳部は、4、5年前からあるにはあったが、名のみというか、現在とは程遠い状態のクラブであった。そこで、奉職と同時に山岳部顧問となった私は、集まった部員を前にこんな第一声を放ったのである。

「力を合わせて困難に挑み、それを乗り越えた時の心からの喜びを味わってください。危険を除くことは、指導者である私の仕事。一丸となって極限状況へ挑戦することをテーマに、女子高校生として成しうる可能性を伸ばしましょう。高校3年間の山に賭けたクラブ活動を通じて『青春に悔いなし』となるように、意気を燃やして私についてきてほしいと思います」

私自身、今考えるところばゆいほどの意欲に燃えていたわけだ。

東京でいちばんよく山が見える学校だからという理由で高校を選んだぐらいだから、富士森高校時代の3年間は山に燃えて登山にあけくれ、早稲田の頃も母校の監督をしていた。

そのために、立川女子高校に奉職する際には、富士森の関係者からこんなことも言われたものだった。

「教職に就くことは当然なので、何も申し上げる筋合いはないが、山岳部に関わることはだけはやめてほしい」

なぜこんなことを言われたかといえば、私の物事に熱中し過ぎる性格を知っていた彼らは、立川女子高校で山岳部に関われれば、母校のことなどなおざりになってしまふと危惧したからである。とはいえ、山無しの生活など考えることができない私が、自分の学校に山岳部があるのに無関係でいられるわけがない。だから、彼らの迷惑を知りながらも、顧問を引き受けることになった。

当初、私という若い男の先生に対する興味もあつてか、部員は50人をも数えたが、このクラブの本格的な山行の厳しさを知るにつけ、その数はどんどん減っていった。ほんとうに山が好きな生徒だけに淘汰されていったのである。1年目から、夏は南アルプス北部全山縦走、冬は南アルプス鳳凰三山での合宿を実施したのだから、当然でもあろう。この頃の部員には、今でもOG会の中心である高築、富島や、後輩たちから神様のごとく尊敬されている隈元のような者も出た。

山岳部の顧問を引き受けるにあたり、私がぜひとも確立したかったのは、OG会である。大学時代、先輩後輩の縁で強い選手を誘い、試合には先輩が手弁当で駆けつける、という

ラグビー部の縦の関係を知って、感心もし憧れてもいたせいで、この山岳部にもOGとの関係のすばらしさを取り入れたかったのである。

しかし理由はそれだけではない。お金のこともあった。私が奉職した年の部の予算はたった3500円。いくら時代が違うとはいえ、これでは何もできやしない。テントなどの共同装備も自己負担で、中古のもので間に合わせる始末だった。山行にはどうしてもお金がかかる。部の予算がないなら、先輩たちに協力してもらうしかないのである。それも、大きな理由であった。

こうしてOG会が作られたが、今になってみると、先輩後輩の関係のすばらしさは確実に培われ、どの遠征も日頃の訓練も、OGの力なくしては成しえなかったことがわかり、私の最初の目論見は正しかったと証明された。

訓練は、高校生としてはハイレベルで、しかも私は部員たちにこんな約束もさせた。

「夏山では歯をみがかないこと。天幕内では鏡とクシを出さないこと」

水場まで往復1時間以上も要するのだ。貴重な水の尊さを知ってほしかった。気のゆるみが遭難にもつながる山では、緊張感を持続しなければならない。そのための約束でもあった。しかし、これも部の伝統として確立され、今では私も何も何とも言わない。ここは水が豊富だから顔を洗う、あそこはないから我慢しよう、ということが自然にできるようになったからである。